

企業ニュース 富士フィルムホールディングス

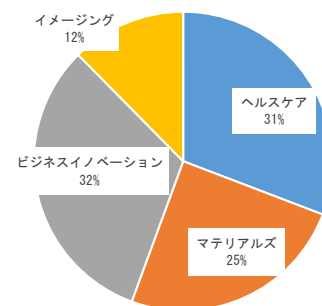
(東証1部 : 4901) <https://www.fujifilmholdings.com/ja>

作成者 : 兵藤三郎

ビジネスイノベーション、メディカルシステム始動

1934年に富士写真フィルムとして創立、2006年に持ち株会社化し現在の商号に改称した。写真用フィルムの需要が激減する中、培ってきた高度な技術を応用し多角化を模索、現在では幅広い事業を展開している。2021年3月、日立製作所の画像診断事業を買収しメディカルシステム事業を強化、同4月にブランド契約を解消した富士ゼロックスを富士フィルムビジネスイノベーションに社名変更。22. 3期より、セグメントを右図の4つに再編した。ヘルスケアはメディカルシステム、バイオCDMO、再生医療、医薬品、化粧品など、マテリアルズは電子材料やディスプレイ材料など、ビジネスイノベーションは旧富士ゼロックスのビジネスを中心としたオフィスソリューション事業及びビジネスソリューション事業、イメージングはデジタルカメラなどの旧イメージングソリューションの事業を展開する。

◇22. 3期売上高計画



(注) 8/13公表ベース

(出所) 富士フィルムホールディングス
資料よりCAM作成

ドキュメント、ヘルスケアでのM&A効果示現で業績伸長

22. 3期・第1四半期(4-6月)の連結業績は、売上高が5,827億円、前年同期比28%増、営業利益が563億円、同176%増。日立製作所の画像診断事業の買収効果もありヘルスケア事業が大きく伸長、その他全セグメントで増収増益となった。ヘルスケアでは超軽量移動型デジタルX線撮影装置やバイオCDMO事業が好調に推移した。営業利益は社内の計画をヘルスケア、マテリアルズ、イメージングの各セグメントでそれぞれ50億円程度(全社で150億円程度)上振れた模様。

22. 3期連結業績の会社計画は、売上高が2兆5,000億円、前期比14%増、営業利益が2,000億円、同21%増。好調な第1四半期の業績を受けて、期初予想から売上高で600億円、営業利益で200億円の上方修正。会社側は修正後の計画に対し、半導体不足の影響、物流費増加、原材料費高騰(アルミ、銀など)、新型コロナ流行再拡大など引き続き高い不確実性といったリスク要因を勘案した上で、最低限達成すべき水準として予想したものとコメントしている。業績に寄与した3セグメントの進捗などを考慮すれば、再度の上方修正も期待できよう。

[株価動向・投資判断]

会社側は、業績計画は上方修正したが、同計画は最低限達成すべき水準と言及、さらなる上方修正が示唆された。中期的にはヘルスケア事業の拡大が期待できよう。

<4901 富士フィルム 業績:米国基準>

[今期予想の配当金は発行会社予想]

	売上高	営業利益	税引前利益	当期利益	1株利益	1株配当
	百万円 (伸び率)	百万円 (伸び率)	百万円 (伸び率)	百万円 (伸び率)	円	円
20. 3	2,315,141 (▲ 5)	186,570 (▲ 11)	173,071 (▲ 19)	124,987 (▲ 9)	306.2	95.00
21. 3	2,192,519 (▲ 5)	165,473 (▲ 11)	235,870 (▲ 36)	181,205 (▲ 45)	453.3	100.00
22. 3 予	2,500,000 (▲ 14)	200,000 (▲ 21)	220,000 (▲ 7)	160,000 (▲ 12)	400.2	100.00



[主要株価指標]	(売買単位 : 100株)
株価 (2021/8/27)	8,726 円
年初来高値(高値日)	9,042 円 (21/8/19)
同 安値(安値日)	5,385 円 (21/1/4)
予想 P E R (22. 3 予)	21. 8 倍
1株株主資本 (PBR算出用)	5,675. 0 円
P B R	1. 54 倍
予想配当利回り	1. 15 %
(1株当たり配当金100. 00円)	
R O E (21. 3)	8. 7 %
発行済み株式数	51,463 万株